

平成 17 年度病虫害発生予察 予報第 6 号

長崎県病虫害防除所長
平成 17 年 9 月 15 日

【気 象（平成 17 年 9 月 9 日発表 1 か月予報 福岡管区气象台）】

九州北部地方では、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れる日が多いでしょう。前半を中心に残暑の厳しい時期があるでしょう。

向こう 1 か月の気温は高いでしょう。降水量は平年並、日照時間は平年並が多いでしょう。

週別の気温は 1 週目、2 週目はいずれも高く、3 ~ 4 週目は平年並か高いでしょう。

要素別確率 単位（％）

要 素	低 い (少 ない)	平年並	高 い (多 い)
気 温	1 0	3 0	6 0
降 水 量	3 0	4 0	3 0
日照時間	2 0	4 0	4 0

* 予報対象地域：九州北部地域

【予報の概要】

向こう 1 か月間における主な病虫害の発生動向は次のように予想されます。

農作物名	病 害 虫 名	発 生 程 度	
		現 況	予 想
普通期水稻	紋枯病 トビイロウンカ (注意報第5号)	やや少 多	並 多
大 豆	べと病 ハスモンヨトウ 吸実性カメムシ類	並 やや少 並	並 並 やや多
いちご	うどんこ病 炭疽病 アブラムシ類 ハダニ類 ハスモンヨトウ	並 並 やや少 やや多 並	並 並 やや少 やや多 並
かんきつ	青かび病、緑かび病 ミカンハダニ カメムシ類	- やや少 少	並 やや少 多
茶	炭疽病 チャノコカクモンハマキ チャノホソガ	やや少 やや多 並	やや少 やや多 並

【普通期水稻】 () 内は平年値 [以下同じ]

1. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(106筆)の結果、発生株率は2.3%(5.5%)、発生

- 圃場率は36.8% (39.0%)であった。
- イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生株率37.0% (19.0%)であった。
- ウ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり本病の発生に好適である。

2. トビイロウンカ

平成17年9月15日付け、病害虫発生予察 **注意報第5号**による。

【大豆】

1. ベと病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

- ア 9月上旬の巡回調査(15筆)の結果、発病株率は3.2% (2.5%)、発生圃場率は40.0% (21.1%)であった。
- イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発病株率は6.0% (4.9%)であった。

2. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

- ア 9月上旬の巡回調査(15筆)の結果、幼虫の寄生株率は1.3% (11.9%)、株当たり虫数は0.05頭 (0.7頭)、白変葉発生圃場率は33.3% (52.5%)であった。
- イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、寄生株率は28.0% (25.7%)、株当たり虫数は0.8頭 (1.5頭)であった。
- ウ フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は、平年より少ない(図)。
- エ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見されるようになったら早急に防除を行う。
- イ 幼虫は齢が進むと薬剤の効果が低下するので若齢幼虫期に防除を行う。
- ウ 薬剤は虫体によくかかるよう丁寧に散布する。

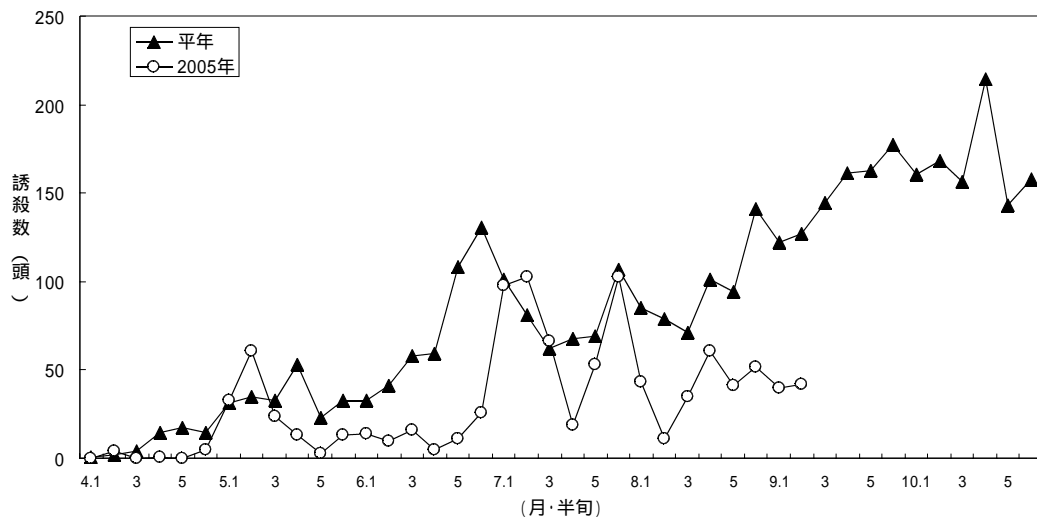


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市)
平年: H7~H16の平均値(最大・小値除く)

3. 吸実性カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(15筆)の結果、寄生株率は0.3%(0.8%)、株当たり虫数は0.01頭(0.01頭)、発生圃場率は13.0%(17.3%)であった。

イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、寄生株率は4.0%(1.4%)、株当たり虫数は0.04頭(0.01頭)であった。

ウ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

稚莢期から莢肥大期にかけて、他の病害虫との同時防除を行う。

【いちご】 (定植前の苗を対象に調査)

1. うどんこ病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発病株率は0.0%(0.0%)、発生圃場率3.0%(0.5%)であった。

2. 炭疽病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(33筆)の結果、*C. acutatum*(通称:葉枯炭疽病)の発病株率は0.5%(1.5%)、発生圃場率は6.1%(8.9%)であった。

また、*G. cingulata*の発病株率は0.0%(0.4%)、発生圃場率は3.0%(9.3%)であった。

3. アブラムシ類

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(33筆)の結果、寄生株率は0.8%(0.6%)、発生圃場率は3.0%(11.9%)であった。

4. ハダニ類

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(33筆)の結果、寄生株率は3.6%(2.0%)、発生圃場率は27.3%(10.0%)であった。

イ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生を認めたら定植までに徹底した防除を行う。

イ 下葉の裏に多く寄生するので、防除は薬液が葉裏に十分かかるように散布する。

5. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(33筆)の結果、食害株率は2.1%(6.3%)、食害発生圃場率は39.4%(62.2%)であった。

【かんきつ】

1. 青かび病、緑かび病

(1) 予報内容

- 発生程度 並
- (2) 予報の根拠
向こう1か月間の降水量は平年並の見込みである。

2. ミカンハダニ

- (1) 予報内容
発生程度 やや少

- (2) 予報の根拠
9月上旬の巡回調査(39筆)の結果、寄生葉率は5.4%(18.0%)、発生園場率は38.5%(64.4%)であった。

3. カメモシ類

- (1) 予報内容
発生程度 多

- (2) 予報の根拠
ア フェロモントラップ(諫早市)による誘殺量は平年より少ない(図)。
イ 病害虫防除員への聞き取り調査によると、園周辺の防風樹(ヒノキ)等には発生が多いが、かんきつ園ではこれまでほとんど見られない。
ウ 8月下旬のピーティング調査の結果、ヒノキにおける枝当たり虫数は1.5頭/枝(前年0.1頭/枝)で、発生量が多かった。
エ 8月下旬のヒノキきゅう果口針鞘調査の結果、県内14カ所の平均口針鞘数は4.6本/果であった。口針鞘数が特に多かった諫早市と有家町で9月12日に追加調査を行ったところ、口針鞘数はそれぞれ14.3本/果、11.2本/果であった。過去の発生状況と比較すると、10月上旬以降に本格的なかんきつ園への飛来が見られると思われる。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 地域によっては、すぐにも園への飛来がある可能性があるため、発生状況に十分に注意し、早期発見、早期防除に努める。
イ 極早生温州は収穫期が迫っているため、薬剤を散布する場合は農薬使用基準に特に注意する。
9月下旬に新しい調査結果を踏まえた発生予察情報の発表を予定している。

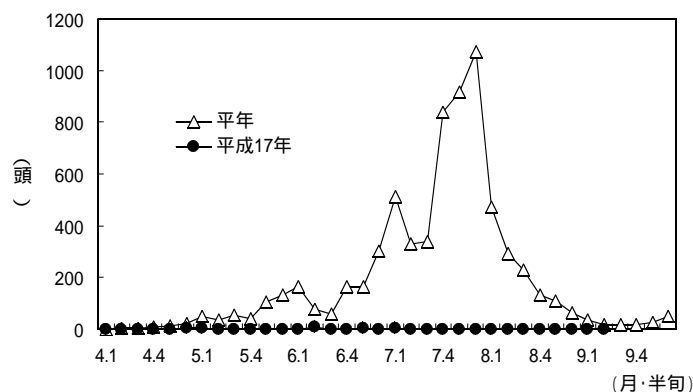


図 チャバネ・ツワアカムシの誘殺状況(諫早:黄色コガネコール)
* 平年値は平成7~16年の平均

【 茶 】

1. 炭疽病

- (1) 予報内容
発生程度 やや少

- (2) 予報の根拠
9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡当り病葉数は5.8枚(11.7枚)、発生園場率は50.0%(63.5%)であった。

2. チャノコカクモンハマキ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡当たり巻葉数は0.1枚(0.2枚)、発生圃場率は23.0%(9.9%)であった。

イ フェロモントラップ(東彼杵茶業支場調査)による誘殺量は、平年よりやや多かった(図)。

ウ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

雌成虫の発生最盛期から7~10日後に薬剤散布すると効果が高い。

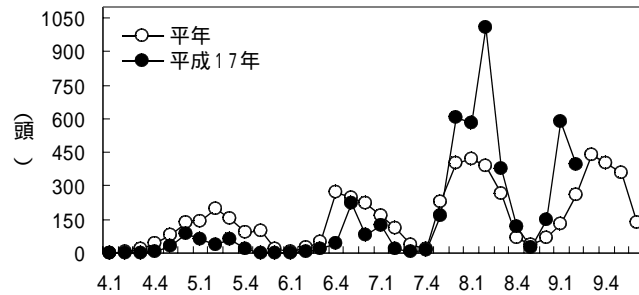


図 チャノコカクモンハマキの誘殺状況(東彼杵:フェロモントラップ)(月・半旬)
平年は平成7年~16年の平均値

3. チャノホソガ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡当たり巻葉数は0.1枚(1.2枚)、発生圃場率は20.0%(15.6%)であった。

イ フェロモントラップ(東彼杵茶業支場調査)による誘殺量は、平年並であった(図)。

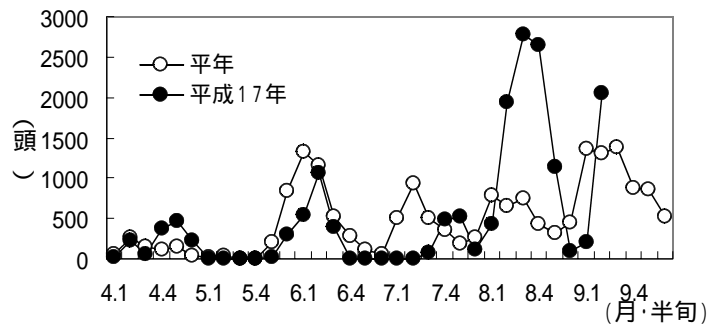


図 チャノホソガの誘殺状況(東彼杵:フェロモントラップ)
平年は平成7年~16年の平均値